

5. 特に問題となった病害虫の発生状況、原因解析及び防除対策

対象作物：水稲

病害虫名：トビイロウンカ

発生程度：早期水稲 やや多、普通期水稲 多

1. 飛来

- 予察灯（諫早市）において6月24日に飛来を初確認（平年6月3半旬）。7月1～2半旬にやや多い飛来、7月4半旬にまとまった飛来。平年よりやや多く前年より少ない飛来量であった。

2. 発生～増殖

- 早期水稲では、主要飛来期以降やや多い発生で推移したが、被害はほとんど認められなかった。
- 普通期水稲では、主要飛来期～7月下旬までやや多い発生で8月以降増加し多発生となった。前年より短翅型雌成虫の発生量が多く（9月上旬）、9月以降の気温が非常に高かったことから9月中旬以降7月1～2半旬飛来の第3世代の密度が急激に高まった。
- イミダクロプリド箱剤の試験圃場(6/20移植、本田無防除)で7月下旬以降虫数の増加が見られたことから、本年も感受性が低い個体群が飛来した可能性が高い。薬剤検定を実施予定。

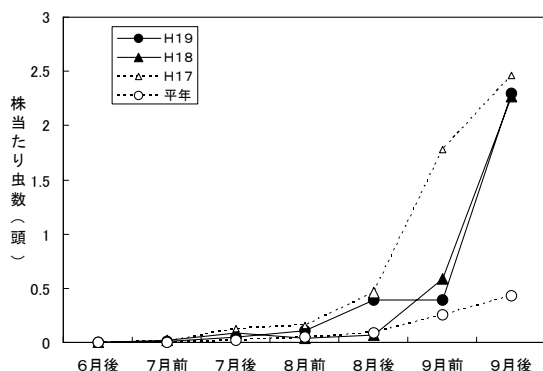


図1 株当たり虫数の推移

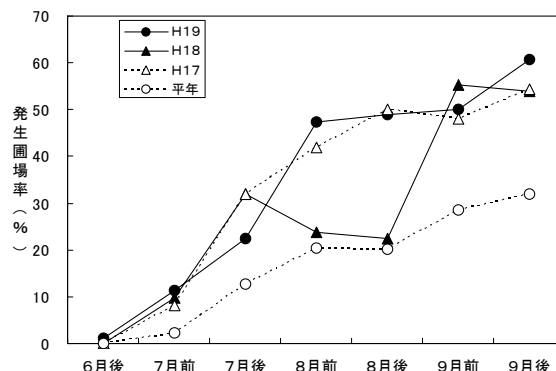


図2 発生圃場率の推移

3. 予察調査と情報発信

- 予察灯（4地点）。ネットトラップ（1地点）。
- 巡回調査月2回（2～3半旬及び5～6半旬、県内概ね90～120圃場）。7月後半及び8月前半は重点的に実施。
- 上記調査結果に基づき7月6、17日に防除情報、8月16日、9月3日に注意報を発表した。
- 予察灯やネットトラップデータは適宜最新の情報をHP上で提供した。

4. 防除指導

- 防除所では、株元へ薬剤が十分付着するよう丁寧な薬剤散布の徹底や圃場見回りの徹底を上記情報により促し、また、県央地域や県北地域の一部の防除検討会にも参加し防除指導を徹底した。

- ・各地域では農協、普及センターが連携して防除指導に当たっている。生産者や無人ヘリ防除組織に対し、防除所が提供する注意報等をもとに各地域の情報を加味し、防災無線やチラシ配布などを使って伝達している。
- ・8月上中旬、8月下旬、9月上旬の3回防除を基本とし、多発圃場では追加防除を呼びかけた。

5. 実際の防除

- ・全域で8月上中旬、8月下旬、9月上旬の3回防除がなされたが、8月上中旬の防除は本年多発生のコブノメイガとの同時防除で、コブノメイガにより重点を置いた防除となった。
- ・防除薬剤は8月上中旬がブプロフェジン剤、8月下旬及び9月上旬がシラフルオフエン剤、エトフェンプロックス剤、ジノテフラン剤主体。
- ・9月中旬以降、多発圃場やすでに坪枯れが発生していた圃場において追加防除が実施された。
- ・無人ヘリ防除では1機でカバーしている地域を防除するのに7～10日かかることがほとんどで適期防除できない圃場が散見された。

6. 坪枯れ

- ・5月下旬植えの圃場を中心に8月下旬頃から坪枯れが発生した。その後、坪枯れの発生はやや鈍化したものの、6月移植の圃場において県内各地で9月下旬以降急激に増加した。前年と比較すると発生数が多く規模も大きかった。
- ・7月1半旬飛来の第3世代虫の発生密度が高く坪枯れが多発したと考えられる。

7. 問題となった点

- ・8月上中旬の防除はコブノメイガとの同時防除のため適期防除ができなかった圃場があった。
- ・無人ヘリ防除では散布作業期間が長くならざるを得ず、必ずしも適期に散布ができなかった。
- ・圃場の見回り不徹底による防除の手遅れや基幹防除の省略。
- ・イミダクロプリド剤に対する感受性低下。

8. 今後の課題

- ・生産者段階における圃場単位での発生状況把握と早期防除徹底。
- ・無人ヘリ防除において適期防除できる体制整備。
- ・株元に薬剤が十分付着するような薬剤散布の徹底。
- ・主要防除薬剤に対する薬剤感受性の把握。

対象作物：水稲
病虫害名：コブノメイガ
発生程度：多

1. 発生経過と原因解析

- ・主飛来は7月1半旬で非常に多い飛来。6月6半旬、7月2～4半旬にも飛来があった。
- ・早期水稲では、出穂期が7月3～4半旬以降であった一部圃場で食害が多かったが、防除が実施され全体としては平年並となった。
- ・普通期水稲では、7月下旬に第1世代幼虫の食害が多発生した。8月1～3半旬に第1世代成虫の発生が多くなり、圃場によっては8月4～5半旬頃まで成虫の発生が続いた。第2世代幼虫による食害は防除が徹底され、平年並の発生となった。

2. 防除対策等対応内容

- ・7月6日に注意報、7月17日、8月16日に防除情報を発表した。
- ・早期水稲では、出穂期が7月3～4半旬以降の圃場を中心に7月3半旬頃に防除が実施された。
- ・普通期水稲では、8月2～3半旬に防除が実施された。その後も成虫の発生が多かった圃場において、8月4半旬にも防除が実施された。

3. 問題となった点

- ・6月上旬移植の圃場では箱施薬剤の残効切れで第1世代幼虫の食害が多くなった。また、箱施薬剤の散布量不足や散布ムラによる薬剤の効果不足も生じた。
- ・第1世代成虫の発生期間が長く1回の防除では残効が不足する圃場があった。

4. 今後の課題

- ・箱施薬剤の確実な使用と移植時期の適正化。

対象作物：水稻

病害虫名：縞葉枯病とヒメトビウンカ

発生程度：縞葉枯病：早期 多 普通期 多、
ヒメトビウンカ：早期 多 普通期 多

1. 発生経過と原因解析

① 縞葉枯病

- ・ 早期水稻では、6月2半旬に発生を認めやや多い発生であったが、その後増加し多発生となった。
- ・ 普通期水稻では、7月2半旬に発生を認め、7月下旬以降多発生で推移した。まれに発生株率が30～40%の圃場も認められた。
- ・ 早期、普通期ともに発生圃場率や発病株率は高かったものの発病度が低い圃場がほとんどであった。
- ・ 保毒虫率が高く、早期、普通期とも本田でのヒメトビウンカの発生が多かった。

② ヒメトビウンカ

- ・ 早期水稻では6月2半旬に発生を認め、7月上旬まで多い発生で推移した。7月下旬以降は減少し、やや多い発生となった。
- ・ 普通期水稻では7月～8月にかけてやや多い発生であったが、9月以降は減少し平年並の発生となった。トビイロウンカの多発生に伴う防除によると考えられる。

2. 防除対策等対応内容

- ・ ヒメトビウンカの保毒率検定を実施し、結果に基づき情報を発信した（防除情報4月10日、発生予察情報6月15日）。
- ・ 小麦作付け地域の一部で小麦でヒメトビウンカの防除が実施された（赤かび病との同時防除）。
- ・ 箱施薬剤の使用。
- ・ 本田防除は8月上中旬、8月下旬～9月上旬でセジロウンカ、トビイロウンカとの同時防除。

3. 問題となった点

- ・ 平成16年以降ヒメトビウンカの保毒虫率が高く、縞葉枯病も多発傾向で推移している。
- ・ 5月下旬～6月上旬に移植される地域での発生が多く、発生株率が30～40%の圃場も認められた。
- ・ 発病株の抜き取り不徹底。

4. 今後の課題

- ・ ウイルス保毒虫率、並びに主要薬剤に対する薬剤感受性のモニタリング。
- ・ 発病株の抜き取り徹底。
- ・ 冬季～春季の耕起の徹底。
- ・ 小麦作付け地域でのヒメトビウンカの防除実施。

対象作物：水稲
病害虫名：紋枯病
発生程度：早期水稲 並、普通期水稲 やや多

1. 発生経過と原因解析

- ・早期水稲では、6月3半旬と平年より早く発生を認め、7月以降やや増加したが、平年並～やや少ない発生となった。
- ・普通期水稲では7月2半旬に発生を認め、平年より発生が早かった。
- ・7月下旬～9月上旬までは一部多発圃場を除き、全体としては平年並の発生で推移した。9月下旬～収穫期にかけては高温により上位葉鞘への進展が続き、坪枯れ状に発生した圃場や倒伏した圃場も散見されたが、防除が徹底されたため、全体としてはやや多の発生となった。

2. 防除対策等対応内容

- ・早期水稲では7月上中旬（出穂期～穂揃い期）の薬剤防除徹底。
- ・普通期水稲では8月上中旬（出穂2週間前）及び8月下旬～9月上旬（出穂～穂揃い期）の薬剤防除徹底。

3. 問題となった点

- ・普通期水稲では9月以降の気温が非常に高かったため多発圃場を中心に防除効果が不足し上位葉鞘への進展が続いた。

4. 今後の課題

- ・多発生圃場における体系的な防除（箱施薬剤＋本田防除）の実施。

対象作物：大豆
病害虫名：ハスモンヨトウ
発生程度：並

1. 発生経過

- ・7月下旬から若齢幼虫の寄生を認めたが、寄生株率、株当たり虫数ともに平年並で推移した。白変葉は8月上旬から散見され始め、発生圃場率はやや高かったが、白変葉か所数は少なかった。

2. 原因解析

- ・8月～9月にかけての高温少雨。

2. 防除対策等対応内容

- ・8月上旬～9月下旬にかけての防除の徹底。

3. 問題となった点

- ・特になし。

4. 今後の課題

- ・的確な発生状況の把握と適期防除。

対象作物：果樹全般

病害虫名：カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ）

発生程度：前半：少（8月前半以前） 後半：やや少（8月後半以降）

飛来時期：前半：－

後半：9月中旬頃（やや遅）

1. 発生経過

- ・チャバネアオカメムシの越冬量は平年より少なかった。（H19:0.1平年：0.4(頭/m²)）
- ・諫早市のフェロモントラップ誘殺量は、年間を通して少ない発生で推移した。西海市西彼町、南島原市有家町では、9月中旬頃から少しまとまった誘殺があった（図）。
- ・7月下旬に実施したヒノキきゅう果着生状況調査の結果、平年より少～やや少の着生量であった。
- ・7月下旬に実施したヒノキきゅう果の口針鞘数の調査結果から、果樹園への飛来時期は、9月中旬頃と予測された。9月下旬の調査では、カメムシ離脱の目安となる25を超える地域が多く見られた。
- ・現地では8月までほとんど発生を認めなかった。9月中旬頃からかんきつ園やなし園で飛来が認められたが、飛来量はやや少なかった。ただし、かんきつ園では防除を実施した園も見られた。
- ・発生の絶対量はやや少ないものの、チャバネアオカメムシと比較してツヤアオカメムシの割合が平年よりも多かった。
- ・9月下旬以降にミナミトゲヘリカメムシの発生が一部の地域（大村市）で多かった。他の地域（西海市、諫早市、佐世保市、長与町）でも発生が認められ、薬剤散布による防除が実施された。

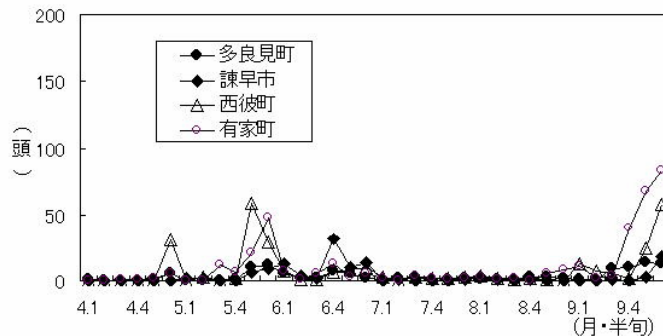


図 チャバネ・ツヤアオカメムシの誘殺状況(黄色コガネコル)

表 ヒノキきゅう果口針鞘数の推移

調査月日	7/下	8/下	9/下
平成19年	0.8	9.4	19.9
平成18年	3.7	11.0	10.6
平成17年	0.1	4.6	13.9
平成16年	3.1	9.6	3.0
平成15年	0.2	3.6	20.1
平成14年	5.9	21.5	28.9
平成13年	0.1	7.3	28.4

2. 原因解析

- ・越冬量が少なかったため、前半の発生量は少なかった。
- ・本年のヒノキきゅう果量が平年より少～やや少であったため増殖量が少なく、ヒノキきゅう果が果樹カメムシ類の餌として適さなくなる口針鞘数が25を超える時期が9月中・下旬頃となったため、平年よりやや少ない発生が9月中旬以降にみられた。

3. 防除対策等対応内容

- ・防除所では、越冬量調査の結果を受け、前半の発生が少ない旨の予測を発生予察情報等で発表した。また、後半の発生量や飛来時期について、8月に技術情報として発表した。

- ・ 9月中旬頃の飛来に対して、かんきつ園特に極早生温州園で薬剤散布による防除が実施された。びわ園やなし園ではほとんど薬剤散布による防除は実施されなかった。
- ・ 大村市では、9月下旬にミナミトゲヘリカメムシの発生に注意するよう防除指導が実施された。

4. 問題となった点、今後の課題

- ・ ミナミトゲヘリカメムシの有効な予察技術がなく、その確立が求められる。

対象作物：かんきつ

病害虫名：かいよう病

発生程度：多

1. 発生経過

- ・ 昨年春葉での発生がやや多く、昨年の9月に襲来した台風の影響で夏秋梢での発生も多くなった。
- ・ 3月上旬に実施した、越冬病斑調査では発生が多かった（発病葉率 1.2%、平年 0.4%）。
- ・ 巡回調査では、春葉で4月下旬に平年より早く発生を認め、その後、多い発生で推移した（図）。
- ・ 果実では、6月下旬に平年よりやや早く発生を認め、その後、やや多い～多い発生で推移した（図）。例年はほとんど発生を認めない極早生温州でも発生を認めた。

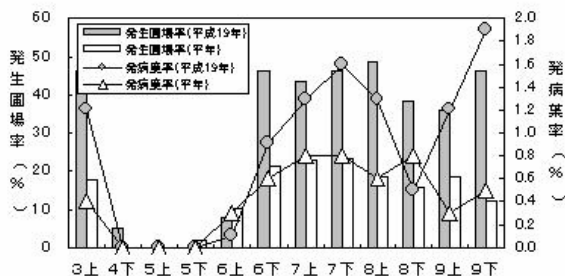


表 かいよう病(葉)の発生の推移

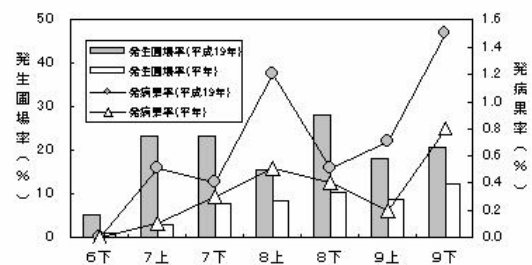


表 かいよう病(果実)の発生の推移

2. 原因解析

- ・ 越冬病斑が多かった。
- ・ 発芽期以降の防除が十分でなかった。

3. 防除対策等対応内容

- ・ 各地域の平成19年度かんきつ栽培暦検討会の際に越冬病斑が多いと予想されること、夏季以降の台風襲来時の際にこれまで使用されてきたストレプトマイシン剤が失効したことから、初期防除を重視する方針を確認した。
- ・ 銅剤による防除を徹底させるため、3月15日及び7月2日に防除情報を発表した。
- ・ 現地でも初期防除徹底の指導が多く地域で実施され、平年よりも多く圃場で、多くの回数、薬剤が散布されたが、発芽期以降の防除は十分ではなかった。

4. 問題となった点

- ・ストレプトマイシン剤のかんきつ登録が失効し、果実着生時に薬害の問題がなく、防除効果が高い薬剤がない。

5. 今後の課題

- ・発芽期以降の防除の徹底。
- ・防除効果が高い薬剤散布体系の確立。
- ・防風樹の整備や発病枝葉のせん除など耕種的防除の徹底

対象作物：ぶどう

病害虫名：べと病

発生程度：少→やや多

1. 発生経過

- ・巡回調査での発生の初確認は6月下旬で平年よりやや遅かった。
- ・葉では、8月下旬までは平年より少ない発生で推移したが、9月に平年よりやや多い発生となった。
- ・9月上旬の巡回調査では、甚発生し落葉が激しい園がみられたが、ほとんど発生が見られない園も多く、園による発生の差が大きかった。
- ・果房での発生は、平年より少なかった。

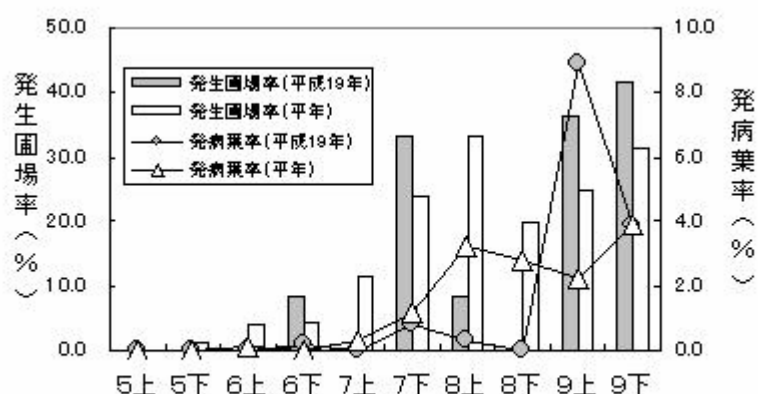


図 ぶどうべと病(葉)の発生の推移

2. 原因解析

- ・7月上旬は雨量が多く、本病の発生に好適な条件であったが、平年でも発生に注意すべき時期であるので、防除が的確に実施され、発生が抑えられた。
- ・8月までの発生が並～少なく、気象条件も発生しにくい条件であったため、べと病防除に対する意識が低く、8月下旬～9月上旬の防除が徹底されなかった。

3. 防除対策等対応内容

- ・防除所では、9月14日付の発生予察情報で注意を呼びかけた。
- ・発生が多い園では、8月下旬以降に臨機防除が実施された。

4. 問題となった点

- ・ 9月に入ってから発生が増加を的確に予察することができなかった。
- ・ 8月下旬以降に臨機防除が実施されたが、園によっては発生を抑制することができなかった。

5. 今後の課題

- ・ 感染好適条件を予測できるシミュレーションモデル等の確立。
- ・ 発生初期の防除の徹底。

対象作物：かんきつ

病害虫名：チャノキイロアザミウマ

発生程度：多

1. 発生経過

- ・ 6月下旬に被害果の発生を認め、その後、やや多～多い発生で推移した。
- ・ 特に、7月上旬～8月上旬に果梗部の被害が、9月下旬に果頂部の被害が急増した。
- ・ 諫早市のトラップ誘殺量は8月上旬～9月上旬にかけて、やや多～多であった。
- ・ 9月下旬以降の極早生温州みかんの収穫時でも果実での寄生虫が目立ち、被害が進行していた。

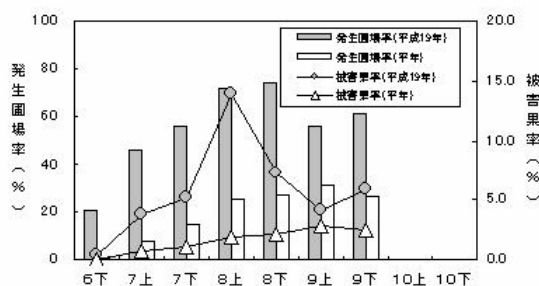


図 巡回調査におけるチャノキイロアザミウマ被害(果梗)の推移

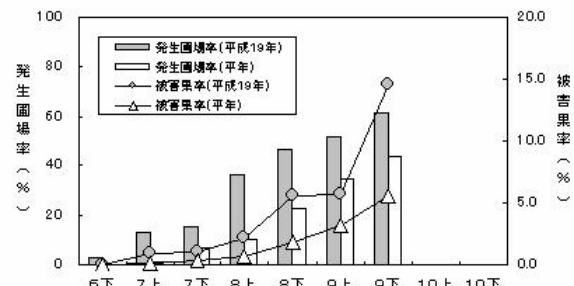


図 巡回調査におけるチャノキイロアザミウマ被害(果頂)の推移

2. 原因解析

- ・ 冬季の気温が非常に高かったこと、茶園では第1世代の発生が多かったことから、越冬量が多かったと思われる。
- ・ 5月中旬～6月下旬、7月中旬～9月下旬の高温・少雨。
- ・ 果梗部の被害が8月下旬に減少したのは摘果によると思われる。

3. 防除対策等対応内容

- ・ 7月2日に防除情報を発信し、発生シミュレーションモデル等の利用による効果的な防除を呼びかけた。
- ・ 発生が多い地域では、発生シミュレーションモデルを利用した薬剤散布による防除が実施された。
- ・ 一部の園では、平年ではほとんど実施されない第8世代(9月下旬～10月上旬)の防除が実施された。

4. 問題となった点

- ・発生が多く、防除情報等を発表した但、第7世代（9月上旬）の防除が不十分で、極早生温州の収穫間際、場合によっては収穫期間中にも薬剤を散布しなければならぬ状況になった。

5. 今後の課題

- ・例年、臨機防除で実施される第7世代（9月上旬）の防除の参考となりうる発生予察体制の確立。

対象作物：茶

病害虫名：カンザワハダニ

発生程度：多

1. 発生経過

- ・巡回調査を開始した2月から3月上旬にかけて発生が多かった。
- ・その後7月下旬までは平年並みに推移したが、8月上旬以降に再び多い発生となった。
- ・大きな被害は出さなかったが、一番茶芽では、一部で摘採を中止した園が見られ、秋芽においても芽伸びが悪いなどの被害が出た。

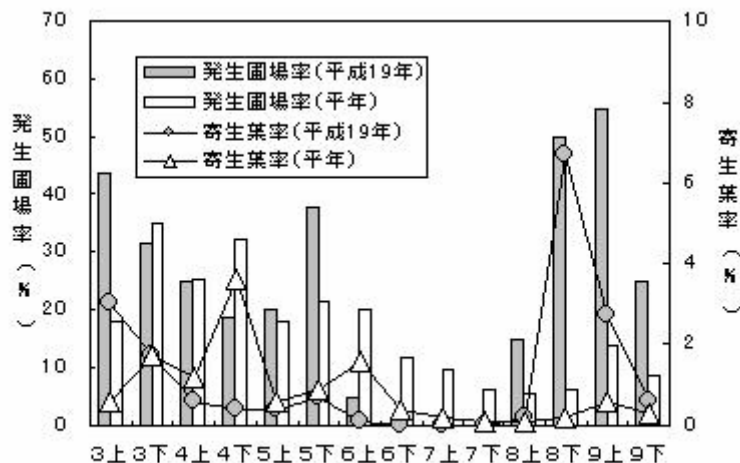


図 茶カンザワハダニの発生の推移

2. 原因解析

- ・1～3月の高温、7月中旬～9月下旬の高温・少雨。
- ・防除の徹底。

3. 防除対策等対応内容

- ・3月15日、9月3日に注意報を発表した。
- ・現地でも徹底防除の指導が行われ、防除が徹底された。

対象作物：茶
 病虫害名：チャノミドリヒメヨコバイ
 発生程度：多

1. 発生経過

- ・一番茶萌芽期から発生が認められ、その後秋期まで多い発生で推移した。
- ・二番茶で水色に赤みが出る被害がやや目立った。
- ・秋芽にも吸汁を受け、生育遅延などの症状が見られた。

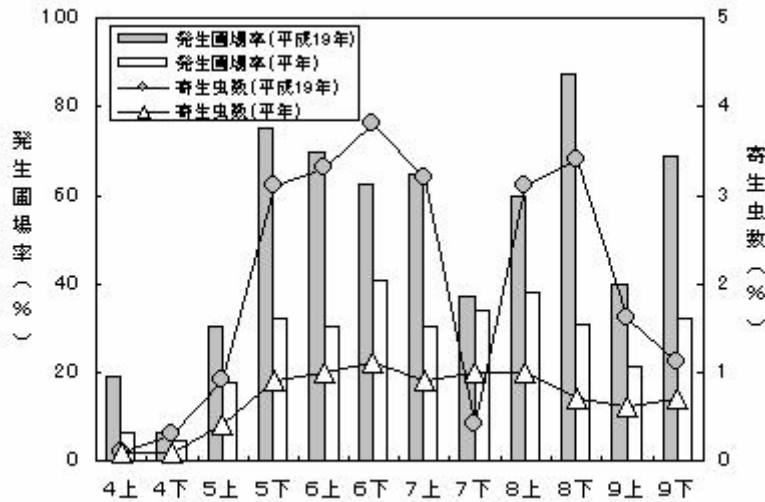


図 茶チャノミドリヒメヨコバイの発生の推移

2. 原因解析

- ・1～3月の高温、7月中旬～9月下旬の高温・少雨。

3. 防除対策等対応内容

- ・5月25日、9月3日に注意報を発令した。
- ・現地でも徹底防除の指導が行われ、臨機防除が実施された。

4. 問題となった点

- ・臨機防除が実施されたが、被害がやや目立った。

5. 今後の課題

- ・感受性検定結果等に基づく、防除薬剤の選択。

対象作物：イチゴ
 病害虫名：炭疽病 (Glomerella cingulata)
 発生程度：並

1. 発生経過と原因解析

- ・ 依頼診断で6月下旬（前年5月中旬）に初確認後、7月に増加したが、抜き取りや薬剤防除の徹底により、本病を検出した件数は前年に比べ大幅に少なかった。
- ・ 巡回調査では6月下旬から発生を認め、7月下旬に発生圃場率15%、発病株率1.4%と増加した。しかし、その後は発生圃場率9~16%（前年：25~36%）、発病株率0.2~0.4%（前年0.5~2.4%）と前年に比べ少なく推移した。
- ・ 発生圃場では6月3~4半旬、7月1~3半旬、8月1半旬および5半旬~9月1半旬の降雨及び高温により感染、発病が進んだものと思われる。
- ・ 炭疽病に感受性の高い品種「さちのか」が作付面積の55%を占めている。

2. 防除対策等対応内容

- ・ 予察情報等による情報提供。
- ・ 薬剤防除体系モデルの提示。
- ・ 対策検討会の開催（全農県本部主催）。
- ・ 指導事項の重点化（ランナーの早期切り離し、長雨時に散布間隔を空けすぎない、梅雨明け後の全戸巡回による罹病株の早期発見および防除指導）。
- ・ 高設・雨よけ育苗施設の導入推進。

3. 問題となった点

- ・ 親株の潜在感染株簡易検定では、感染株を有する農家の割合が21.8%と高かった。
- ・ 生産者段階で汚斑状斑点の区別がつかず、廃棄処分の判断が難しい。
- ・ アゾキシストロビン剤に対する耐性菌を確認した。

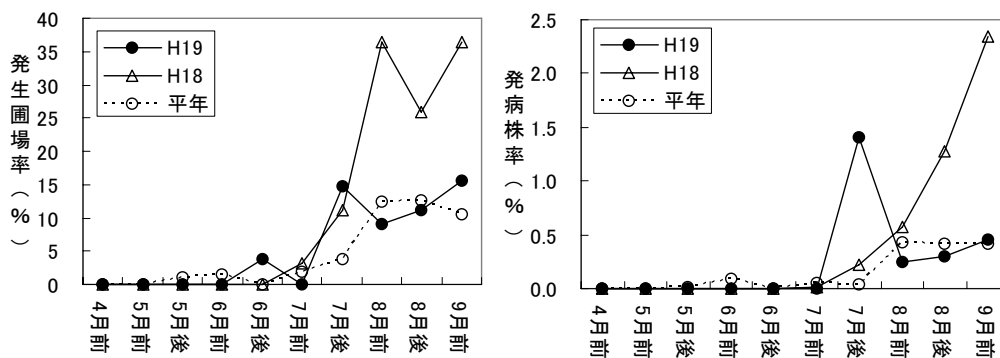


図 イチゴ育苗床における炭疽病(G.cingulata)の発生推移(巡回調査)
 平年: H9~H18の平年値(最大・小を除く)

4. 今後の課題

- ・ 伝染環を遮断するため、無病親株生産システムの確立。
- ・ 生産者や指導機関に対する育苗期の病徴判別力の向上。
- ・ アゾキシストロビン剤耐性菌の分布実態の把握（現在調査中）。
- ・ 新規有効薬剤の登録。

対象作物：イチゴ

病害虫名：ハダニ類（ナミハダニ）

発生程度：H18作本圃：多、H19作育苗圃：並～多

1. 発生経過と原因解析

<H18年作本圃>

- ・ 10月下旬以降多発生で推移し、特に2月上旬から4月にかけて密度が急増した。
- ・ 10月上旬～11月上旬及び1～3月の高温、9月下旬～11月上旬の少雨

<H19年作育苗圃>

- ・ 巡回調査での発生圃場率は育苗期間を通して平年より高く推移した。

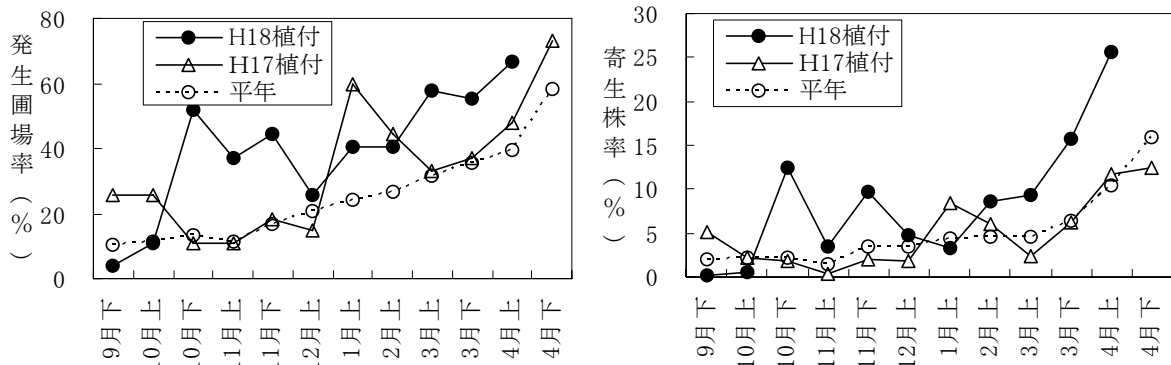


図1 いちご本圃 ハダニ類の発生推移(巡回調査)

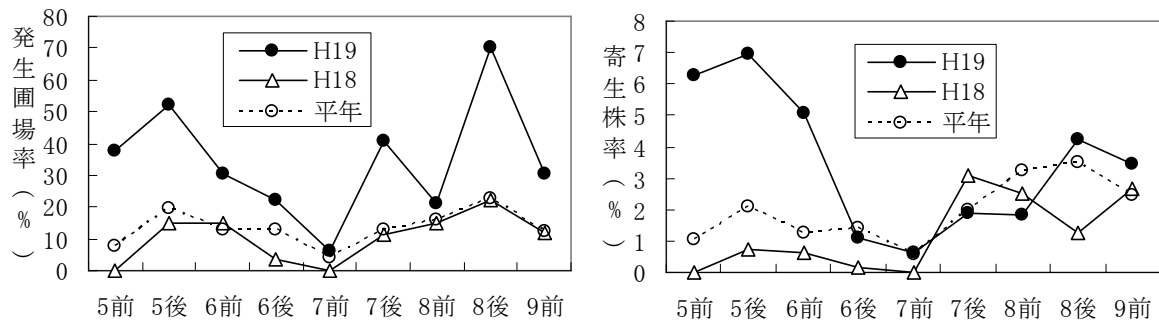


図2 いちご育苗床 ハダニ類の発生推移(巡回調査)

2. 防除対策等対応内容

- ・ 予察情報等による情報提供（平成19年2月14日付け注意報、9月14日付防除情報ほか）。
- ・ 天敵利用を基本とした防除体系モデルの提示。
- ・ 主要な防除薬剤について効力検定を実施。
- ・ 実証展示圃（天敵利用）の設置。

3. 問題となった点

- ・ 有効薬剤の効力低下、有効薬剤の不足。
- ・ 有効薬剤の不足から天敵利用技術に取り組む生産者も増えてきているが、生産者、技術者の使用方法などへの理解が不十分（放飼時期のバラツキ、遅れなど）のため、効果が見えにくい。
- ・ 「さちのか」の高設栽培の導入が進み、ハダニの発生が増加傾向にある。

4. 今後の課題

- ・適切な防除時期把握のための巡回調査強化。
- ・天敵利用の普及指導体制の確立。
- ・有効薬剤に対する感受性のモニタリング。
- ・新規有効薬剤の登録。

対象作物：イチゴ

病害虫名：ヒメヨコバイ類

発生程度：多

1. 発生経過と原因解析

- ・巡回調査で5月下旬から被害葉を認めた。
- ・発生のピークは7月下旬で、発生圃場率59%、被害株率8.1%と高く、発生が多かった平成17年のピーク（発生圃場率49%、被害株率6.4%）を上回った。
- ・5月中旬～6月上旬の好天が増殖に好適であったと思われる。その他の要因は不明。

2. 防除対策等対応内容

- ・予察情報等による情報提供。

3. 問題となった点

- ・イチゴにおける発生生態が不明なため、防除が難しい。
- ・登録薬剤が無い。
- ・多発圃場ではネオニコチノイド系剤や合成ピレスロイド系剤が使用されているところがあり、ハダニ類などのリサージェンスが懸念される。

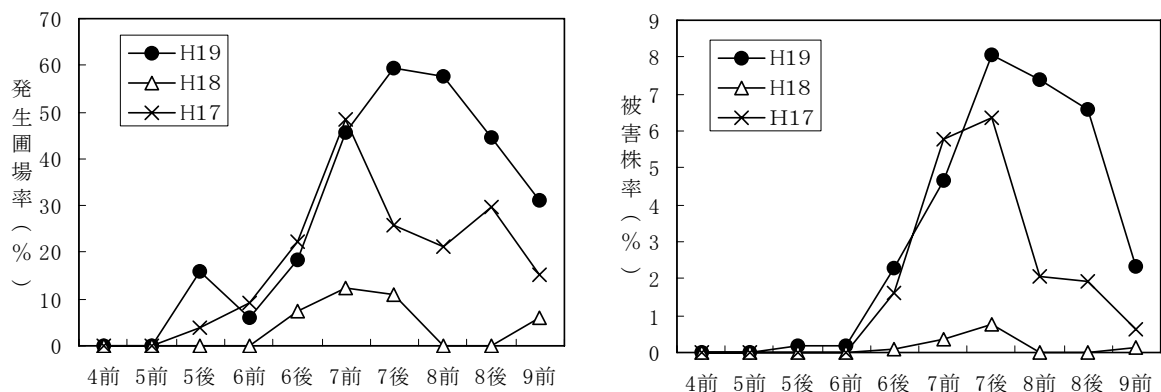


図 ヒメヨコバイ類被害葉の発生推移(巡回調査)

4. 今後の課題

- ・発生生態の解明と防除法の開発。
- ・本虫の被害がいちごの生育に及ぼす影響の解明

対象作物：トマト、ミニトマト

病害虫名：黄化葉巻病

発生程度：H18作：やや少、H19作：並～やや多

1. 発生経過と原因解析

〈H18年作〉

- ・前年に比べやや少ない発生であった。発生面積が前年よりやや少なく、発生程度も軽い圃場がほとんどであった。
- ・媒介虫の発生は秋～冬は平年並で推移した。巡回調査で確認したコナジラミの種類はタバココナジラミがほとんどであった。
- ・育苗期の防除対策が徹底されたため、感染株及び媒介虫の本圃への持ち込みが減少した。また、本圃での発病株の除去及び媒介虫の防除対策が徹底された。

〈H19年作〉

- ・8月～9月に定植のミニトマトにおける発生は、並～やや多である。

2. 防除対策等対応内容

- ・関係機関との連携による地域ごとの発生状況調査。
- ・予察情報や研修会等における情報提供。
- ・実証展示圃を設置し、成果をもとに防虫ネットや粘着テープ、薬剤体系による総合的防除を指導。

3. 問題となった点

- ・高温期に定植されるミニトマトなど、一部で媒介虫の侵入防止対策が不十分な圃場が見受けられる。
- ・媒介虫、特にタバココナジラミバイオタイプQに効果の高い薬剤が少ない。

4. 今後の課題

- ・夏～秋における媒介虫の発生量や保毒率調査など、予察技術の確立。
- ・目合いの細かいネットで被覆した場合の栽培技術確立（特に昇温抑制対策）。

対象作物：トマト、ミニトマト、アスパラガス
病害虫名：タバココナジラミ（バイオタイプQ）
発生程度：並（トマト）、多（アスパラガス）

1. 発生経過と原因解析

- ・ H18年植付のトマトでは、平年並の発生であったが、一部では栽培後期には密度が高まった圃場もあった。
- ・ H19年夏以降は、野外トラップにおける誘殺数が多い地域がある（普及センター調べ）。
- ・ アスパラガスでは6月頃から発生がみられ、7月以降に多発圃場が認められるようになった。特に平成18年秋定植圃場で発生が多い傾向があり、茎葉を刈り取らずビニル被覆下で冬越しさせたためと思われる。

2. 防除対策等対応内容

- ・ 予察情報や研修会等における情報提供（平成18年12月25日付け技術情報ほか）。
- ・ トマト、ナスでは実証圃の成果をもとに防虫ネットや粘着テープ、薬剤体系による総合的防除を指導。
- ・ アスパラガスにおける発生実態調査を実施予定。
- ・ 島原地域では普及センター主催でアスパラガスでの防除対策会議を開催。物理的防除法など、応急的な取り組みを協議。

3. 問題となった点

- ・ 一部の有効薬剤に偏重した防除が行われており、感受性低下が懸念される。
- ・ トマトでは、TYLCV対策として防虫ネット主体の侵入防止技術が普及し一定の効果が得られているが、作型や他品目によって、施設内の昇温を嫌って侵入防止技術が普及しにくい。
- ・ これまで発生が少なかったアスパラガスで多発生し、有効薬剤が少ない。一部ではすす病が全面に発生し、草勢が衰えて収穫が無くなる激しい被害を生じた。中刈りや全刈りを行った圃場もあり、次年度の収量への影響も懸念される。

4. 今後の課題

- ・ 有効薬剤に対する感受性のモニタリング。
- ・ 各作物における薬剤防除、耕種的防除、物理的防除を組み合わせた総合的な防除技術の実証。

対象作物：ウリ類
病害虫名：黄化症

1. 発生経過と原因解析

- ・依頼診断で黄化病（CuYV）陰性であった事例については、黄化症の疑い有り（H18、19年産各1件）。
- ・巡回調査地点（きゅうり）において黄化症状株が認められている。

2. 防除対策等対応内容

- ・コナジラミ対策として防虫ネットやUVカットフィルムの利用と薬剤防除の体系化を指導。

3. 今後の課題

- ・発生原因の解明。
- ・コナジラミの有効薬剤に対する感受性のモニタリング。

対象作物：キュウリ、メロン

病害虫名：黄化えそ病（MYSV）、黄化病（CuYV）

1. 現状

- ・黄化えそ病については発生を確認していない。
- ・黄化病と疑わしい症状についての依頼診断がきゅうり（H18年10月）とメロン（H19年10月）各1件ずつあったが、遺伝子診断の結果、CuYV陰性で発生を確認していない。
- ・CuYV媒介虫（オンシツコナジラミ）の発生は少ない。

対象作物：ばれいしょ、いちご、ブロッコリー、レタス
 病害虫名：ハスモンヨトウ
 発生程度：並 → 多

1. 発生経過と原因解析

- ・ 9月下旬以降目立って被害が増加し、多発生となった。
- ・ 諫早市のフェロモントラップ誘殺量は、7月と10月中旬には平年を上回ったが、その他の時期では並もしくはやや少ない傾向で推移した。
- ・ 巡回調査における発生状況は次の通り。

<レタス>

9月下旬の発生圃場率が30%（平年9.9%）、寄生株率は2.4%（平年0.4%）と高かった。

<いちご>

10月上旬の本圃での発生圃場率が93%（平年78%）、被害株率は17%（平年11%）と高かった。

<ブロッコリー>

10月上旬のヨトウムシ類の発生圃場率は92%、寄生株率は24%であった。

<ばれいしょ>

10月上旬のヨトウムシ類（ハスモンヨトウ、シイモジヨトウ）とオオタバコガをあわせた食害発生圃場率は90%（平年45%）、被害株率は28%（平年7.2%）と高かった。

- ・ 8月以降の高温少雨が、増殖に好適であった。

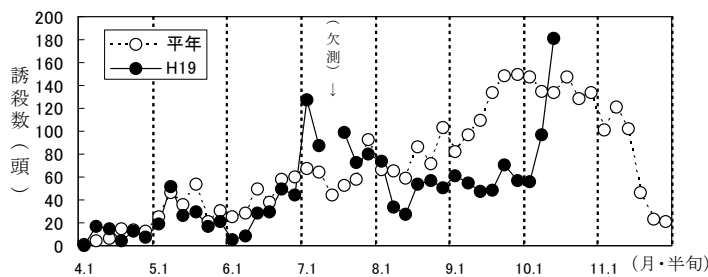


図1 ハスモンヨトウのフェロモントラップにおける誘殺状況(1)
 平年：H9～H18の平均値(最大・小値除く)

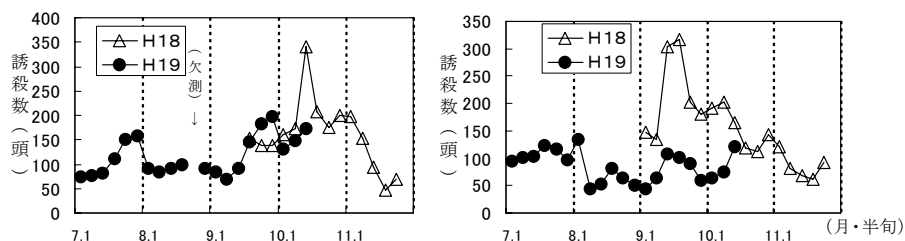


図2 ハスモンヨトウのフェロモントラップにおける誘殺状況(2)

注1) 原則7日ごとの調査結果を、1日当たり誘殺数に換算後、半月ごとに合計。

注2) 雲仙市千々石、南島原市南有馬とも、平成18年9月から調査を開始した。

2. 防除対策等対応内容

- ・ 予察情報等による情報提供（19年10月3日付け防除情報ほか）。
- ・ 現地では普及センターが主体となり、交信攪乱剤を利用した総合防除技術を実証展示（ブロッコリー、だいこん、にんじん）。

3. 問題となった点

- ・ 発生量の急激な増加で、防除に遅れを生じた。
- ・ トラップ誘殺数の推移からは、早期防除につながる判断が困難であった。

4. 今後の課題

- ・ 早期防除の徹底。
- ・ 指標植物調査の導入等による予察精度の向上。

対象作物：レタス、ばれいしょ
 病害虫名：オオタバコガ
 発生程度：多

1. 発生経過と原因解析

- ・諫早市のフェロモントラップ誘殺量は、5月以降平年より多く推移した。6月5半旬～7月1半旬、8月1半旬、9月2半旬にピークが認められたほか、10月2半旬の誘殺数は198頭と平成10年以降で最多を記録した。
- ・巡回調査では10月上旬のばれいしょでの寄生虫数が0.1頭/株、発生圃場率が55%と一昨年（寄生虫数0.02頭/株、発生圃場率15%）および昨年（発生を認めなかった）に比べ高かった。また、本虫及びヨトウムシ類をあわせた食害発生圃場率も90%（平年45%）、被害株率は28%（平年7.2%）と高かった。
- ・8月以降の高温少雨が、増殖に好適であった。

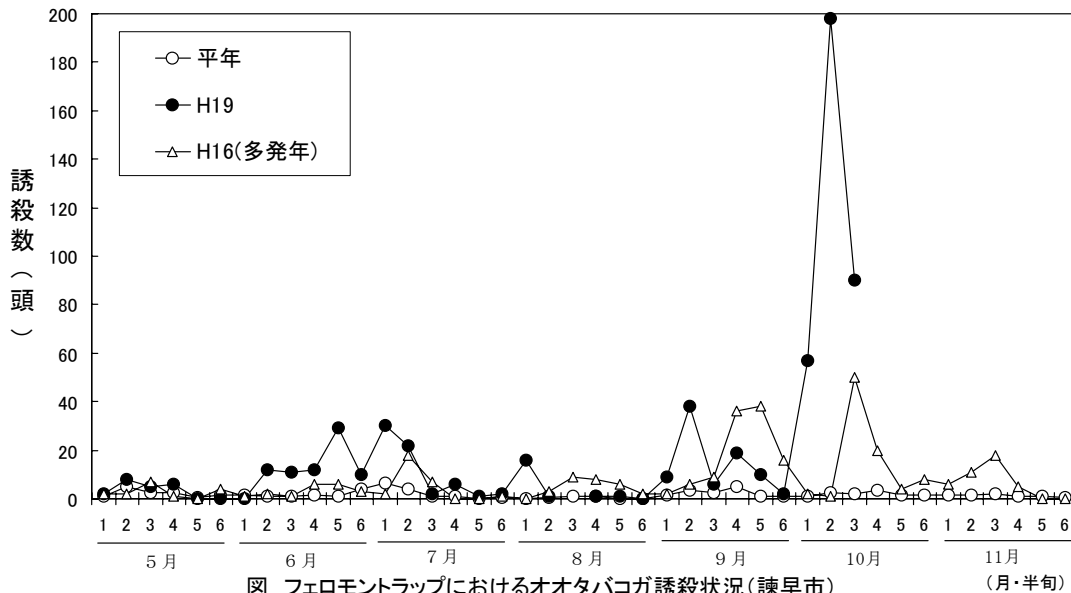


図 フェロモントラップにおけるオオタバコガ誘殺状況(諫早市)
 ※H19データ:8月13日、14日データ欠測
 平年:H10~H18の平均値(最大・小値除く)

2. 防除対策等対応内容

- ・予察情報等による情報提供（19年9月14日付け防除情報、10月15日付注意報ほか）。
- ・現地では普及センターが主体となり、交信攪乱剤を利用した総合防除技術を実証展示（ブロッコリー、だいこん、にんじん）。

3. 問題となった点

- ・発生量の急激な増加で、防除に遅れを生じた。
- ・秋冬の露地野菜植え付け時より多発生の状況が続き、一部品目では有効薬剤が不足した。

4. 今後の課題

- ・防除適期の、より適切な情報提供内容・方法等の検討。
- ・新規有効薬剤の登録。